

## 大きなプラタナスの木

僕の家から中学校に行く道の途中に、大きなプラタナスの木がある。小学生の頃は、この木の先を右に曲がって学校に行っていた。中学生になってからは左に曲がる。つまり、小学校に入学してからのこの七年間、僕は学校に行く日にはいつも、この木のそばを通過していたことになる。

今日は始業式。僕は、いつもより早めに家を出た。期待と不安が入り交じった気持ちでいっぱいになりながら歩いているうちに、プラタナスの木のところまで来た。草むらに入り、そっと幹に触れた。てのひらから伝わってくる、滑らかな樹皮の感触がとても気持ちいい。僕は、空に向かってそびえる木を見上げた。

(大丈夫だ。何も不安になることはない。)

僕は、心の中でつぶやいた。プラタナスがそう励ましてくれるかのように……。

◆  
二年生になってから一か月がたった。新しいクラスでは初めてのさまざまな出会いがあり、お互いを確かめ合うような雰囲気が続いていたが、今は、落ち着くべきところに落ち着いた感じだ。

今朝の僕は明らかに焦っていた。総合的な学習の時間に発表し合う自分の学習計画ができていなかったからだ。足早に学校に向かい教室に着くと、一心に計画を立て始めた。休み時間も、そして昼休みも。結局、なんとか、五・六時間目の授業にまにあい、発表もう



まくいった。

今日は部活動がない日なので下校の時刻は早い。友達と校門を出てしばらく楽しく話した後、その友達とも別れて、プラタナスの木のところにさしかかった。

その木は、輝く西日を全身で受け止め、空に向かって堂々とそびえ立っていた。そういえば、今朝は、このプラタナスの木を見た記憶がない。幹にそっと触れてみた。しばらくその感触に浸った後、僕は、

(じゃあね。)

と心の中でつぶやいて歩き始めた。なぜか、プラタナスの木が僕の後ろ姿を見つめているような気がした。



今日は土曜日。学校で部活動の練習試合があるため、七時には家を出なければならなかった。ところが寝坊をしてしまい、お母さんからたっぷり叱られた。寝る時間が遅いことだけでなく、僕の部屋が片づいていないことまで、お母さんから言われ、さらに、妹が、「そうだろうだ、お母さんの言うとおりで。」なんて言うものだから、頭にきてしかたがなかった。

学校に向かう途中、空き缶でも落ちていれば思いきり蹴り飛ばしたい気分だった。やがて、プラタナスの木が見えてきた。

(いつものように立っているな。)

と、歩きながら木を見つめた。すると、樹皮に人が無理やりつけたような傷があった。僕は、それが心に引っかけかきながら学校への足を速めた。

今日はその後も、いろんな意味で最悪だった。弁当は玄関に置いたまま忘れてしまい、友達から少しづつもらいう始末。練習試合では僕のミスで、相手に得点を献上してしまった。しかし、仲間は僕をいっさい責めずに励ましてくれた。その気遣いは涙が出るほどうれしかった。学校を出た時間は遅かったが、七月だから日は長く蒸し暑い。



(そういえば……。)

僕は、プラタナスの木のそばに行った。

(確かに、これは金属か何かでつけられた傷だ。でも傷は浅いな。)

手でなでて治るものではないが、僕はその傷にてのひらを当て、

「大丈夫だ。」

と思わずつぶやいた。すると、

「木に話しているの変だよ。」

と、後ろから声をかけられた。振り向くと、同じクラスの純子が、きよんとした顔をして立っていた。僕は、少し取り乱しながら、

「なんだよ。なんでここにいるんだよ。」

「なんだよはないでしょ。私こそ、何をしてるのかわかって思っ。木とお話してたでしょう。」

「そんなことはしてないよ。」

「えー、話していたよ。まあ、いいか。どうしたの。」

「木に傷がつけられていて……。」

純子は、てのひらでやわらかくその傷に触れ、

「優しいんだね。この木、友達なの。」

と、笑顔で振り返りながら言った。

「木が友達なわけはないだろ。それに、優しいわけじゃないし。ただ、毎日見ている木だから……。」

「ねえ、毎日こうして見ているの。」

「いいや、学校に行く時に必ずここを通るから。視界に入っているはずなのに見てない時もあるし、気になる時もあるし、あと、こうして近くに来る時もあるし……。」

「日によって違うのね。私もこの道をよく通るけど、この木が気になったことは一度もない



## 大きなプラタナスの木



わ。なんか不思議ね。この大きな木は、いつも同じようにこの場所で大きく枝を広げて立っているのに。」

（そう、この木は、僕の生まれの前からいつも変わらずここに立っている。変わるのは人だし人の気分だ。）

そう考えていた時、純子が突然、

「自然って、人間の心を映し出す鏡かもね。」  
と、大きな幹を見上げながら言った。

「鏡って、どういうこと。」

純子は何も答えなかったが、自分はよく分かっているといった様子だった。そして純子は、何かに気づいたように、

「鏡がないと、自分が分からなくなっちゃうよ。」

だから大切にしなきゃね。」

と言った。僕も木を見上げた。

（純子は難しいことを言うなあ。鏡とはどういうことだろう。ただ、確かにこの木は、僕の全てを知っているような気がする。）

プラタナスは、空と大地をつなぐように枝を大きく広げ、二人を見守っていた。